熊本大学英文学会
〒860-8555
熊本市黒髪２丁目40番１号
熊 本 大 学 文 学 部
英語英米文学研究室内
電話 (096)344－2111(代)
[HP]http://www.let.kumamoto-u.ac.jp/literature

熊本大学 英文学会だより

ハーン・レリーフの前に立って

会長　西川盛雄

私は今構内のハーン・レリーフの前に立っています。これはハーン没後百年の年（二〇〇四年）に学長以下熊大教職員有志の方々の募金によって作られたものです。このハーン先生は旧制第五高等中学校の英語の教師でした。筆者もハーン・レリーフ制作のお手伝いを少しでもさせていただいたことは生涯忘れることはありません。また大学教育センター横に夏目漱石先生の座像があります。この漱石先生も同じく英語の教師でした。熊本大学文学部英語英米文学研究室はこれら二人の文人かつ優れた英語教育者に繋がっているのです。

私たちの学会は現在一三〇〇名の卒業生・修了生を擁し、会員相互の研究と親睦に貴重な役割を果たしています。今年で五十二周年を迎え、その創設から今日に至るまで果たしてきた役割の大きさは計り知れません。毎年秋には総会と学会と親睦会を兼ねた会合があり、本年は十一月二十九日(土)に予定されています。これまで機関誌『英語英文学』と『英文学会だより』を年一回、『同窓会名簿』を四年に一回発行してきています。英語には英・米文学、英語学、そして英語教育の柱があり、研究領域は多岐にわたりますが、それぞれに研究と教育を軸にいい仕事をしていかなければなりません。

現代、大学の果たすべき役割は国際貢献と地域貢献です。この柱を今後私たちの領域でどのように具体的に成果を上げていくかが重要になります。現役の学生諸君も卒業生や熊大スタッフの諸氏もこの研究室に繋がってこの会を今後もぜひ大切に守っていっていただきたいと思います。

来年三月で私は定年で会長職を辞することになります。第五〇回記念大会を皆様の協力によって成功裡に終わらせることが出来たことや学会講演に英語教育の講演を組み込むことが出来たことは忘れられない思い出です。次期会長は安浪誠祐先生にお願いすることになりました。今後のますますの発展を心よりお祈りいたします。ありがとうございました。

ことばの追求よりも

足立昭七郎（3回・昭30卒）

ここに一枚の年賀状がある。平成三年、元旦に今は亡き河原畑正行先生から頂いたもので、私にとってそれ以降の生活を根源的に律する貴重な宝物であった。そして今からも生涯を通じて「自戒を促す言葉」として大切にして行きたい。

「ことばを追い求めるのも目標の一つでしょうが　たましいを見つめることも目標になると思いますが」

私が一般教養の一年生の時、法科の友人（三宅英治君）に "knock me at the gate." （正確な英語は忘れたが、これに類するものであった）の 'me' の用法を河原畑先生に直接聞いてくれないかと頼まれて、恐る恐る研究室に先生をお尋ねしたのが先生との最初の出合いであった。先生はこの 'me' が 'ethical dative' と呼ばれる与格の用法であることを丁寧に教えて下さった。そしてその日から私は語学の勉強を決意し、先生からの御指導を仰ぐこととなる。

さて、先生は私をある学校に世話しようとしておられた。一切の弁解を排して結論だけを言えば、私はその先生の御好意を裏切ったのである。そして、その翌年、平成三年元旦、私が五十八歳の時に、あの年賀状を頂いたのである。私は今でも十四世紀の宗教改革者ウィクリフと彼の聖書の原典となった「ウルガタ」を読んでいて、数年後にはまとめたいと思っている。しかし、先生の「たましいを見つめることも目標になると思います」という珠玉のお言葉は、すべての研究、すべての業績を越えるものでなければならないと思っている。

今思うこと

高橋（旧姓・川津）浩子（17回・昭44卒）

▶同期会旅行にて（上海）

卒業して四十年、転勤族の夫と共に七回の転居の後、東京五年、横浜に落ち着いて十八年。長いがアッという間に過ぎた年月です。

今私は、小学五年生から大学受験生までの子ども達を相手に自宅で英語を教えています。

平凡な主婦の私に訪れた大きな転機、それは平成元年、十五歳になったばかりの長女との突然の死別。これが第一。第二に次女の私立ミッションスクールの中学英語の教科書を見た時のカルチャーショック（長女は国立中学だったのでいわゆる公立の教科書）。最後にあるシステムとの出会い。当時、喪失感と自分の英語力に対する自信のなさから、勉強しなおそうと参加した講習会で、大学時代に吉田先生の英語学講義を受けていた時の自分が思い出され、子ども達に教えたいとの思いから教室を開き、今日に至っています。

小学生から英語を繰り返し（CD）聞かせては繰り返し音読。語順訳（英文構造を意識させつつ）そして暗記。一方ABCから始めフォニックス導入。語彙力、文法、英作文と単なる会話だけでない総合的な英語力をつける方法を私自身学んでは教えるの繰り返しで過ぎた十六年。生徒達は次々と中学、高校生となり、毎年大学受験生を前に過去問に取り組む次第。昨年度も全員志望校に合格との報告は、うれしい限りです（TOEICも受験）。子ども達が理解し力をつけ、成長する姿を見るのは実に楽しく、私自身エネルギーをもらえる様で、今しばらくは、教える事をがんばっていけるかなと思っています。

私達十七回生は、学園紛争の真っ最中、バリケードと卒業阻止の運動の中、学生集会を行い、卒業式もなく、皆で社会に出た同期生。それだけに東京武夫原会への出席率もよく、法文科生よき仲間として交流しています（飲み会や還暦を機に始めた旅行等）。四十年目の卒業式をとの声も出ている今日この頃です。

卒業生として、職員として

西本（旧姓・渕野）江利子（48回・平12卒）

卒業して八年余が経ちました。

母校である熊本大学に採用になり、学生として四年間を過ごしたキャンパスに、今は、事務職員として毎日通っています。途中、医学部・本荘キャンパスに勤務していた頃には、熊本大学授業開放の制度を利用し、大野先生の「英米文学批評講読」を受講するために通ったこともありました。後期の月曜六限目の講義で、勤務時間終了後に、英文研究室にて、Elizabeth Gaskell の *Wives and Daughters* を読みました（現役の頃のテキストは、Margaret Drabble の *The Millstone* でした。同期の皆さんには、懐かしく思い出されることと思います）。学生と一緒に受講するわけですから、迷惑をかけないようにと、週末やっとの思いで予習していました。

英文学とは、最近では縁遠くなってしまいましたが、卒業後、職員として熊本大学と関わり続けることを志望したのは、本学でよい友人たちや先生方に出会い、打ち込める学問があり、美しいキャンパスを歩いた、充実した学生生活を過ごさせて頂いたからに他なりません。後輩学生の皆さんには、よい学生生活を送るための助けとなりたい、また、母校の発展に少しでも貢献したいという思いからです。平成十六年四月に国立大学は法人化され、熊本大学も他の例に漏れず、厳しい競争的環境の中にあります。伝統を大切にしつつ、常に前進し続ける母校を誇らしく思うとともに、皆さんも近くにお越しの際や、今年が四回目の開催となるホームカミングデー（十一月二日）を機会に、懐かしいキャンパスにお越しいただきたい、また、熊本大学の今を見ていただきたいと思います。

熊本大学HPアドレス
http://www.kumamoto-u.ac.jp/

もう一つの夢

金矢結希（53回・平17卒）

大学の時、教員免許は取ったし教育実習も楽しかった。しかし、教壇に立って「学問」として英語を教えるのは私にはどうも違うと思った。意思疎通の「道具」として、自分で英語を使いたかった。卒業後は中学の時の夢だった学校図書館事務に就いたが、もう一つの夢だった英語関係の仕事を諦めきれず、二年で退職。半年に及んだ就活は、本来の目的を見失いそうになることの連続だった。しかし、いくら凹もうと、誰かが自分の代わりに受けてくれるわけではない。内定を持ってきてくれるわけでもない。この会社がダメならあの会社を、と意識には会社の名前だけが先行していたが、自分を必要としてくれる職場、自分の力が最大限に発揮できる職場に、との思いにいつしか変わっていった。

そうしていくつも落とされたおかげで、今の職場で働くことが出来ている。半導体メーカーで、数学七割、英語三割の業務ではあるが、海外とのメール、英語での電話会議、文書の和訳・英訳、グローバル基準の資料作成と、まさに「道具」として英語を使える環境。正社員になれば海外出張も視野に入ってくる。たいした社会人経験も無い私が採用されたのは、「英語」の資格が一因にあるのだろう。

しかし正直なところ、英検は二次の面接が嫌で、高二の二級受験以来まったく受けていなかった。大学以降は筆記だけで済むTOEICに走った。しかし、憧れてやまない人が実は英検一級所持者だと知り、その人のレベルに少しでも近づきたいというすこぶる不純な動機だけで、昨年準一級を受験したのである。一次試験は一発合格したものの、二次は三回目でようやく合格した。残すところは一級。英語でつまづいた時にいつも思い出す、大野先生の授業で長編小説を読破したことで得た「自分も出来るんだ」という自信。その自信を原動力に変え、英語のさらなる高みを目指して日々精進していきたい。

熊本初の地球のステージ

福島（旧姓・吉田）泉（29回・昭56卒）

大学を卒業して、就職のため上京してから、早数十年。輸入商社に勤務したり、英会話スクールの講師をしたり、細々と英語に関わってはきましたが、現在は千葉県で福祉関係のNPO法人の広報担当、子育て支援のNPO法人こどもネットワークの活動、そして五年前から自宅で塾を開いてこどもたちと関わっています。忙しいばかりでお金にはならないのですが、NPOの活動や活動している人々の魅力にはまっています。

今年の二月には熊本がらみで忘れられないビッグイベントがありました。それは、〝地球のステージ〟のコンサートを熊本で開催できたことです。〝地球のステージ〟とは現役の医師である桑山紀彦氏が、世界中の紛争地に医療支援に行き経験したことを、映像と音楽で綴るとてもユニークなコンサートです。ご本人が撮った映像と自作の歌、そして今の世界の状況をわかりやすく語ってくれます。全国の学校中心に年間二百を超えるステージをこなし、各地には熱烈なファンもいます。その桑山さんが、「熊本でなんとかステージをできないかなぁ。全国で行ってないただ一つの県が熊本なんだ」と。これに私の眠っていた熊本県人魂が刺激され、無謀にも友人とふたりで実行委員会を立ち上げてしまったのです。

赤字覚悟で国際交流会館を予約、チラシを刷り、親類縁者・友人・同窓生に声をかけ、たくさんの方が動いてくれてなんとか席が埋まりそうとホッとしたのですが、熊日新聞にインタビュー記事が載ったとたん自宅の電話が鳴りっぱなし。「熊本にこんなに関心を持ってくれる人がいるんだ！」と感激しました。そして、コンサート会場にたくさんの高校生・大学生がいたことがとてもうれしかったです。年に一度帰省するだけになっていた熊本ですが、〝地球のステージ〟を通じて熊本のよさを再確認しました。

昔は人生五十年といいました。自分がその年になって、伊藤先生のおっしゃった言葉がときおりふっと思い出されます。「毎回今日の講義が最後の講義だと思って教壇に立っている」私も先生のように生きられているかな？自問自答の日々です。

命の尊さ 歌と映像で

山形県の精神科医・桑山紀彦さん

「地球のステージ」16日、熊本市

世界五十五カ国を訪れた医師が、子どもたちとの出会いや、命の大切さを歌と映像で訴えるコンサートがあった。山形県上山市の桑山紀彦さん（九九年、平成八）年から始めた「地球のステージ」。熊本での初公演が十六日に後に迫ったから、熊本市花畑町の国際交流会館で聴かれる、桑山さんの、ステージへの思いや、国内外の活動についてもらった。

「地球のステージ」は一九九六年一月に始まった。全く新しタイプのコンサートです。熊本の会場には正面に巨大スクリーンがあり、そこに、その合間に私が歌います。映し出される映像は、世界の紛争地や、貧困な国々の様子なのです。なぜなら、こどもたちの笑顔は、光り輝いており、ものすごいパワーが伝わってきます。映像に音楽が乗ると、ものすごいパワーが出てきます。

私は医師としてこれまで五十五カ国を歩きました。国際医療援助隊という組織に入って、ソマリアで出会った少女は、重い水タンクを背負い、何ものの道のりを裸足キャンプまで、まるで、映画のラストシーンを見るような感動とともに、世界の出来事がよくわかってきます。それは、「世界の紛争地」で、私が歌います。映し出される映像は、世界の紛争地や、貧困な国々の様子なのです。医療援助隊という組織に入って、十五カ国を歩きました。国際ボランティアとして

教育実習体験記

四年　久保田　翔

初夏の日差しが厳しくなる五月の下旬、平成二十年度教育実習生として、再び母校である済々黌高校の黌門をくぐらせて頂きました。体育祭の余韻も落ち着き、今度は高校総体に向けて慌ただしく生徒達が動き出す中、忙しくも充実した二週間を共に過ごすことが出来ました。

初めて教壇に立ったときは、緊張で手が震えそうでした。その時のことを思い出すと、今でも冷や汗をかきそうになるくらいです。その後の日々のことは書き出すと膨大な量になってしまいますが、思うように指導法が上達せず、すごく苦しかったことが一番印象に残っています。そして、その中で一番感じたのは、どれだけ教材研究をしてもそれを教室で発揮できなければ意味がないということです。つまり、「何を自分が知っているか」ではなく、「何を自分が伝えられるか」が重要だということです。教師である以上、そしてプロである以上、「頑張った、でも上手く教えられなかった」では済まされません。その厳しさに直面し、終始押しつぶされそうになりながらの二週間でした。その間、時には優しく、時には厳しく、教科、そして教師の心構えを熱心に指導し、支えてくださった指導教員の高木先生には、深く感謝しています。

最終日に行われた研究授業では、英語科の先生だけでなく、高校時代に可愛がってくださった先生方も見に来て頂き、とても感動しました。個人的には、高校時代の担任で三年間英語を指導して頂いた川上先生が見に来られていたのが何より緊張しました。徹夜で臨んだこの最後の授業を、改善すべき点を残しながらも自分なりに今までで一番の内容授業で締めくくることができ、無事、全ての授業が終わりました。

最終日、ホームルームの生徒達、そして水泳部の生徒達が、それぞれ僕に花束と寄せ書きを書いた色紙を贈呈してくれました。二つの色紙と花束を抱えての帰り道は、達成感と感動でいっぱいでした。こうして私の二週間の教育実習が終わりました。

就職活動体験記

四年　坂田涼子

私の就職活動は大学二年の一月に始まりました。憧れる気持ちはありながらも、私には無理だと敬遠していた航空業界（客室乗務員職）。しかしどうしても諦めきれず、大学二年の冬に航空系専門学校に入校し、熊大とのダブルスクールを開始しました。

それからの約一年半は今思い返しても、つらく苦しい毎日でした。英会話、TOEIC、体力づくり、笑顔、立ち居振る舞い…。やらなければいけないこと、クリアしなければならない課題があまりにも多く、いつも、何をしていても不安と焦りを感じていました。「本当に私が通用するのだろうか?」先の見えない生活の中で、何度くじけそうになったかわかりません。

そんなとき私を支えてくれたのは専門学校で出会った同じ夢を持つ仲間の存在でした。「絶対にみんなで一緒に飛ぼう!」と試験のたびに励ましあい、一緒に泣き、笑いあった仲間の存在は、就職活動を乗り切る、何より大きな力になりました。後輩の皆さん、「就活は団体戦」とよく耳にしますが、その通りだと思います。つらいとき、「つらいね」と言い合える人がいることは本当に心強いものです。不安なのは自分ひとりではないことを忘れずに、みんなで励ましあって就職活動を乗り越えてください。

周囲よりはやく取り掛かったこと、そして航空業界という特殊な世界を志したことから、私の就職活動は長く、つらいものになりました。しかし、夢を諦めなかったからこそ「この一年半、無駄にした日は一日も無かった」と胸を張って言うことのできる、とても充実した学生生活が送れたと思うのです。就職活動は自分を成長させる良い機会だと思います。後輩の皆さんの就職活動が成長を実感できる、実りの多いものになるよう、心から応援しています。頑張ってください!!

就職活動を終えて

四年　益田恵里花

私が就職活動を始めたのは、部活を引退した三年生の冬でした。当時は漠然とした仕事のイメージしか持っておらず、手探りの状態で学内の企業説明会にひたすら参加しました。就職活動のスタートは自ら動いて情報収集することです。それまで興味のなかった会社でも、運命の一社になる可能性は十分に有り得ます。説明会はもちろん、会社四季報やインターネットなどに情報はいくらでも溢れているので、ぜひ活用してください。実際私はふと話だけでも聞いてみようか、という気持ちで行った物流会社の、社会の根底を支える事業内容や親しみやすい社員の方々の雰囲気に惹かれて受けた会社に内定を頂き、入社を決めました。

また、会社を選ぶ上で自分なりの軸を持っていないと、後悔することになると思います。自分にとって何がいちばん大切なのか?仕事のやりがい、勤務地、給与、福利厚生など人によって違うと思いますが、本格的に就職活動を始める前に一度考えてみてください。

就活で忙しい時期のアドバイスとして言えることは、まず面接ではとにかく笑顔で元気よく話すこと。いくら話の内容が良くても、話す自分が自信なさそうにしていると説得力がありません。次に試験に落ちてもいちいち落ち込みすぎないこと。私は内定を頂くまで数十社落ちました。必ずあなたを見てくれる会社が見つかります。最後に決して一人で就職活動をしようと思わないこと。就活中は肉体的にも精神的にも疲れがたまり、沈みがちなので、共に就職活動をしている友達と情報交換や息抜きをすることが大切です。

就職活動は夢への第一歩。英文の皆さんを心から応援しています。

教員を目指して

四年　万膳宏章

私は、四年生となった今年、母校の中学校、高校において五週間の教育実習を行った。幼いころからの夢であった教員の現場を、わずかな期間ではあったが、体験することで改めて教員への希望を膨らませた。大学での三年間で学んだ教育的知識やメソッド、見識、思考を最大限活かし、またその一つ一つが実際の現場でどう行われているか実感することができた。また、日曜参観や定期テスト作り、定期テスト採点、クラス設営、学活・道徳の授業といった、普通の教育実習ではなかなか経験できないことを経験することができた。この教育実習を通して、一貫した教師としての信念、生徒への教育的愛情、客観的理解、確かな人間力、地域や家庭の方々の篤い信頼、そして教師としての仕事が激務であることなどを学んだ。

そして、今年の夏、地元鹿児島にて、校種は高校として教員採用試験を受けた。試験会場には、多くの臨時採用や非常勤の教員の方々がおり、高い倍率を共に競い合った。筆記試験、面接、実技と改めて高い人間性を試された。結果は、一次試験不合格だった。試験の手ごたえはあったが、満点を取る程のできでなければ、合格は難しいと感じた。これからは、もっと勉強をしてできるだけ早く教壇に立てるようにしようと思う。

教員は、これからますます社会的に厳しい風を受けていくと思う。免許更新制をはじめ、日々研究と修養を続け、慢心せず進まなければならない。しかし、だからこそ大きなやりがいと責任を感じることができる。これから、教員の道を選ぶ人は、ぜひ確固たる覚悟で、免許等も取得し精進していただきたい。半端な覚悟では太刀打ちできない場である。

大学三年生になって…

三年　垰　美穂

私には、大学三年生になって初めて経験することが三つあります。

一つは、留学生のチューターをすることです。以前から興味はあったのですが、なかなか自分の英語力に自信がなくて立候補できずにいました。しかし、ある友人の留学をきっかけに私も「この日本でまずできることを始めよう」と決意し、今秋から引き受けることにしました。今でもまだ自分にできるか不安はありますが、精一杯責任を持ってやり遂げていこうと思っています。

二つ目は、英文合宿の幹事です。去年の合宿に参加した三年生が私を含めて三人しかおらず、その中でも一人は留学してしまうので、実質二人になってしまいました。二人で全て決めるのは大変ですが、仲のいい同じ学年の友達にも相談しながら、思い出に残る合宿を計画しています。英文は他の欧米コースの研究室に比べて大所帯であることもあり、普段の生活では一人ひとりとゆっくり話す機会はあまりありません。私自身二年生で初めて英文合宿に参加したことで、先輩達と親しくなることができました。だからこの合宿を通して、先輩・後輩ともっとお互いについて知り合い交流を深められたらと思っています。そしてこれから大学在学中はもちろん、卒業後も英文卒業生としての絆を大切にしていきたいです。

三つ目は、卒業論文です。本格的に取り組むのは四年生からなのですが、夏休みまでに自分が研究するテーマを考えなければなりません。これまで授業を通して、英米の様々な作家・作品について学んできました。その中には、興味を抱くようなテーマがいくつもありました。たくさんありすぎてまだ一つに絞ることはできていないのですが、四年間の大学生活の証にふさわしい論文に仕上げたいです。

▲2007年度合宿研修（指宿）

事務局より

「たより」への原稿集めのむずかしさを痛感しております。寄稿候補者は、原則として会費納入者のなかから、できるだけ卒業年が偏らないようにして選ばせていただいていますが、今回の受諾率は50%。研究室に対する思いは、卒業生それぞれに違ったものがあられるのでしょう（結果的に現役学生の記事が多くなりました）。会員は1,300名ほどですが、そのうち住所がわかる方が800名弱。会費の納入者は百数十名にすぎません。教員側の努力にもかかわらず、現役の学生ですら100%に届きません（別表参照）。それでもここまで続いているのは、70歳を超えても協力してくださる方々や、会長をはじめとする幹事スタッフの「つぶしてはいけない」という使命感のゆえだと思います。

2007年度学部卒業生十年会費の低納入率（別表参照）をふまえて、去る４月18日、幹事教員５人で、同窓会のあり方について話し合いました。解体の可能性も示唆されましたが、結局は存続させていくことで合意しました。ことし52年目を迎える組織には、さすがに伝統の重みがあります。

唯一の運営資金である会費の納入率をあげるために、次のような努力をすることにしました。①「たより」は原則全会員に配布（これまで、過去３年間に一度も会費の納入がない方には、送付を中止していました）、②会費の納入状況を住所ラベルに示す、③学会のゲスト・スピーカーに新風を、④ホームページを充実させる、⑤在校生の意識改革を促し、会費納入率100%をめざす、等々。みなさんのご協力を期待してやみません。

「英文学会」の活動は、資金の続く限り、続けていきます。

2008年度現役学生の会費納入状況（９月10日現在）

課　程	対象学生数	納入者数	納入率（%）
博　　士	3	3	100
修　　士	4	4	100
学　部　4　年	18	7	38.9
学　部　3　年	17	16	94.1
学　部　2　年	?	13	?
研　究　生	1	1	100
合　計	43	31	72.1

※会費は、院生2,000円、学部生1,000円。合計には、学部２年生（英文志望生）分は含みません。

10年会費納入率（2008年９月10日現在）

年度	学部卒業生			修士修了生		
	対象卒業生数（本学大学院進学者を除く）	納入者数	納入率（%）	対象修了生数（本学博士課程進学者を除く）	納入者数	納入率（%）
1997	15	11	73.3	1	1	100
1998	16	13	81.3	2	1	50.0
1999	20	15	75.0	1	1	100
2000	10	1	10.0	3	1	33.3
2001	16	10	62.5	1	0	0.0
2002	14	11	78.6	3	2	66.7
2003	15	11	73.3	3	2	66.7
2004	11	8	72.7	2	2	100
2005	25	14	56.0	2	2	100
2006	12	9	75.0	2	2	100
2007	15	1	6.7	5	5	100
平均	15.4	9.5	60.4	2.3	1.7	74.2

※「10年会費」とは、卒業間もない会員の負担を軽減すると同時に、会の運営を安定させるために1997年度から導入され、卒業（修了）時に10年分の会費10,000円を前納してもらうものです。11年目からは一般会費（年3,000円）になります。